

八幡昌樹の社会科（第4学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

社会科では、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことがより一層求められている。よりよい社会の形成に参画する資質や能力とは、よりよい社会を築くために自分に何ができるかを考えることである。中学年社会科では、地域社会における人々の健康な生活や良好な生活環境、安全を守るための諸活動について学習する。ここでは、地域社会における社会的事象（以下：事象）の特色や相互の関連を、自分の生活とのかかわりで考えることが大切になる。そこで私は、自分の生活とのかかわりの中で、**地域社会の一員としての自覚をもつ子ども**を目指す。「自覚をもつ」とは、「地域社会の一員としての意識を高め、協力できることを考える」ことである。

これまでこのような子どもの姿を目指して、子どもにとって身近な事象を探り上げ、家庭や学校の様子を調べさせたり、地域の人々の工夫や努力を考えさせたりして学習を進めてきた。しかし、事象を個別的な知識として理解することはできても、地域社会の一員としての自覚をもつところまでたどり着かない子どもがいた。

その原因は、教師が地域社会において事象同士が関連している中に、事象と自分の生活とのかかわりが含まれていることに気付かせる視点を与えていないことである。そのため、子どもは「〇〇のおかげで△△できる」という理解になってしまい、地域社会に対して自分が協力できることに目を向けられなくなるのである。

そこで、次のように指導を改善する。それは、複数の立場の取組について、事象同士の関連に気付いている子どもに、取組が行われているにもかかわらず、上手くいっていない事実を提示して、事実について解釈したことを基に、自分の生活とのかかわりから協力できることを考えさせることである。この時、資料から分かる事実と事実から解釈したことを「チャート図」を用いて整理してまとめさせる。同様に板書においても色分けしてまとめる。こうすることで、自分の思考を整理しながら結論を導き出すことを促す。そして、地域社会の人々が取組に込める共通の思いに気付いて共感し、自分も同じ思いで地域社会にかかわっていく必要があると実感するようになる。

このようにして、地域の人々の思いに共感したり、自分がかかわる必要性を実感したりした子どもは、「〇〇や△△の人たちが同じ思いをもって取り組んでいる。自分も同じ思いをもって◇◇することで、地域社会に協力ができる」などと考えるようになり、地域社会の一員としての自覚をもつようになる。

(1) 「中核的な知識や技能」

地域社会と自分の生活とのかかわりについての認識

(2) 「学びをつなぐ力」

- ① 関係付けるすべを用いて、地域社会と自分の生活とのかかわりについて考えるために必要な情報を収集する力
- ② 関係付けるすべを用いて、既存の知識と収集した情報を総合して、地域社会と自分の生活とのかかわりについて考える力

2 主張する働き掛け

子どもはこれまでに、事象について見学や調査といった問題解決的な学習を通して、事象に携わる人々の工夫や努力についての具体的な知識を習得している。そして、複数の立場の取組の共通点を見いだすことによって、事象同士の関連に気付いている。しかし、自分が地域社会に協力できることは何かという視点からは考えてはいない（C0）。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

事象についてうまくいっていない事実を提示し、この事実に対しての事象に携わる方の話を聞かせる。

地域社会と自分の生活とのかかわりについて、問いをもたせるための働き掛けである。ある事象について、共通の思いをもって取組が行われていると気付いた子どもに、地域社会においてうまくいっていない事実を提示する。子どもは、これまでの学習から「複数の立場の人々が同じ思いで工夫や努力をしているはずなのに、なぜこのような事実があるのか」と考える。そこで、補足説明する資料を提示した上で、この事実に対して事象に携わる方がどのように考えているかという話を聞かせる。この話は、自分がかかわる必要性に目を向けさせる内容である。すると、子どもは「それなら自分はどうしたらいいのだろうか」と疑問に思い、それを学習問題として設定する。そこで、

学習問題に対する自分の考えを問う。子どもは、既存の知識や生活経験を基にして、自分が生活の中でできることを考える。

働き掛け2

問題が発生した結果（「対象」）を提示し、分かった事実と、事実について解釈したことを「チャート図」にまとめさせる。

地域社会と自分の生活とのかかわりについて考えるために必要な情報を収集させるための働き掛けである。学習問題について、自分に何ができるかを考え始めた子どもに、**問題が発生した結果（「対象」）**を提示する。子どもは、資料の読み取りを通して、問題の発生に伴う影響の大きさに気付く。そこで、「チャート図」を提示し、問題が発生した結果「対象」から分かった事実、事実について解釈したことを順に問い、整理してまとめさせる。すると子どもは、関係付けるすべを用いて、既存の知識と問題が発生した結果「対象」とを結び付けて「○○という事実が分かる。この事実から△△ということが考えられる」のように、いくつかの事実から分かったこと、事実について解釈したことを記述する。そして、このような問題の発生によって、生活に大きな影響を与え、その解決に多くの人々を巻き込んでしまうため、自分は問題につながることをしてはいけないなど考えるようになる。



働き掛け3

考えたことを交流させた後、学習問題の結論を問う。

地域社会と自分の生活とのかかわりについて考えさせるための働き掛けである。「チャート図」に事実と解釈をまとめた子どもに、学級全体でお互いの考えを交流させる。その時に、1つの問題が発生することによって多くの人に与える影響、その問題への複数の立場の人々の取組に関する意見に対しては、考えをはっきりさせるために問い返す。そうすることによって、話題を地域社会と自分の生活とのかかわりに焦点付けていく。子どもは、「多くの人に影響を与えるから、複数の立場の取組が行われている」と考える。そう考えた子どもに、学習問題の結論を問う。すると子どもは、関係付けるすべを用いて、これまでに収集した情報を総合して、地域社会と自分の生活とのかかわりについて「○○や△△の人たちが同じ思いをもって取り組んでいる。自分も同じ思いをもって◇◇することで、地域社会に協力ができる」などと考え、**地域社会の一員としての自覚をもつ子ども**になる。

**「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛け
学習問題が解決した後に、振り返りを書かせる。**

学びをつなぐ力の有用性を自覚させるための働き掛けである。学習問題が解決した後に、そこまでの学習を振り返らせ、どのような考え方をしたのかを問う。すると子どもは、「考えるすべを使ったら、自分が地域社会に協力できることを考えることができた」と学習問題を解決するまでの考え方を振り返り、学びをつなぐ力の有用性を自覚するようになる（Cn）。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な知識や技能」を獲得することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」の有用性を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3において、地域社会と自分の生活とのかかわりについての認識をもつことができたかを、ノートの記述から検証する。
- ② 働き掛け2および3において、関係付けるすべを用いて、必要な情報を収集し、学習問題に対する結論を判断することができたかを、「チャート図」、ノートの記述、発言から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けにおいて、学びをつなぐ力①②のいずれかの有用性を自覚しているかを、ノートの記述から検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業（6月） 「わたしたちの生活と電気」（12時間）
- (2) 中間検討会（9月） 「さいがいからまちを守るために」（12時間）
- (3) 初等教育研究会（2月） 「わたしたちの生活とごみ」（13時間）